

東日本大震災から1年

障害者へのアンケートから学ぶ

開始時間は13時20分です
もうしばらくお待ちください

13:20~14:20 アンケート報告・提言

14:20~14:30 休憩

14:30~16:30 シンポジウム

参加費無料 手話通訳・要約筆記付
何かありましたらスタッフまで...

中野区障害者防災委員会企画

このシンポジウムは中野区民公益活動政策助成事業によって実施しています



中野区の障害児・者への 東日本大震災による影響についてのアンケート結果



2012. 3. 25

中野区障害者防災委員会

資料作成: 佐藤浩子

中野区の障害児・者への東日本大震災による影響について アンケートの実施にあたって

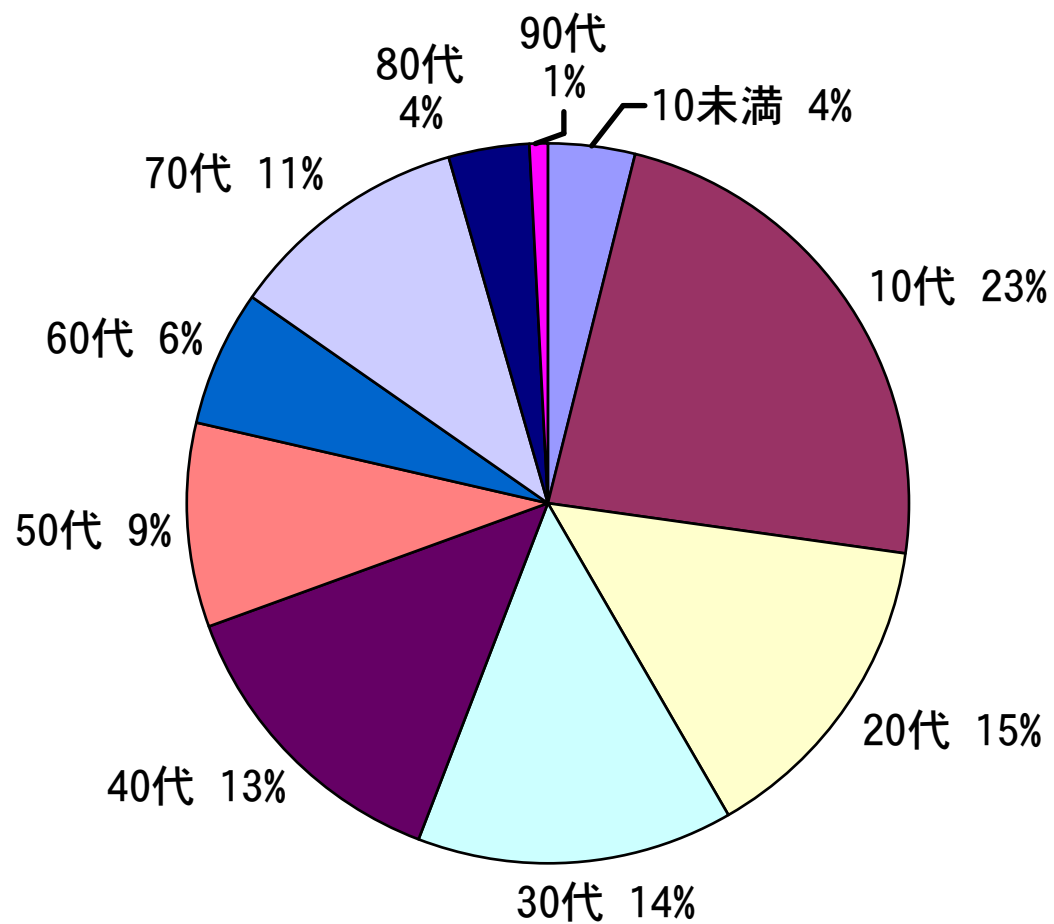
- 目的:3月11日14時46分、中野区も震度5強の地震にみまわれた。障害者防災委員会として、中野区における震災時の障害児・者の状況と課題を把握し、障害者の防災対策に反映させていくために、アンケートを行うことにした。
- 方法:障害者防災委員会に参加している、聴覚障害者福祉協会、視覚障害者福祉協会、愛育会、肢体不自由児者父母の会、障和会、NPOねこの手などの団体が会員などに配布し、回収した。
- アンケート配布期間:2011年8月20日～10月31日

アンケート回答者総数 349人

<input type="checkbox"/> 障害者本人(介助者代筆も含む)	90人
<input type="checkbox"/> 保護者	161人
<input type="checkbox"/> 障害者本人か保護者かが未記入	2人
<input type="checkbox"/> 障害者本人または保護者	計 253人
<input type="checkbox"/> 支援者	96人

ヘルパー 30人 通所施設職員 28人
企業指導員など 11人 ジョブコーチ 7人
学校教職員 7人 グループホーム職員 6人
社会福祉協議会職員 3人 その他 4人

障害者本人の年齢



障害別年齢別一覧

	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80歳以上	空欄	計
視覚				1	2	4	3	8	7		25
聴覚				2	2	2	4	15	1		26
肢体			2		2	6	3	2	1	1	17
知的	8	54	24	22	24	7	4	2		3	148
重心	2	4	7	4	3	1	1		2		24
精神			3	6	1	3					13
計	10	58	36	35	34	23	15	27	11	4	253

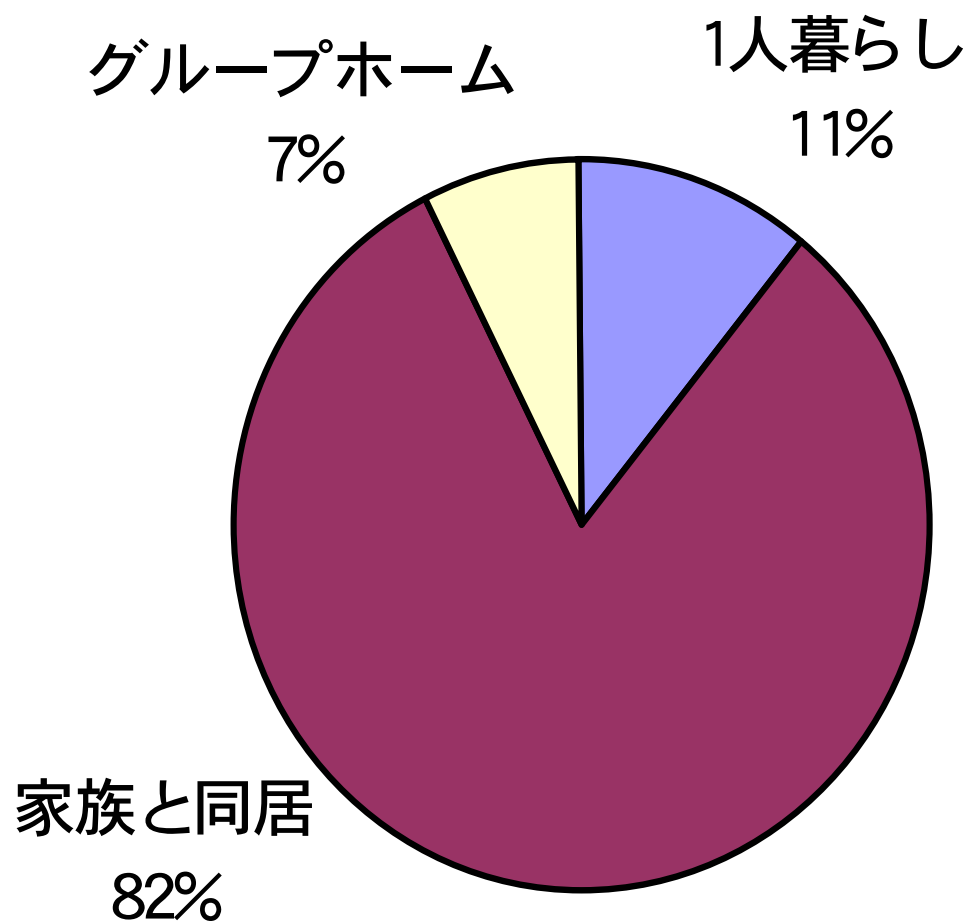
障害により回答者の年齢に大きな違い

- 視覚障害者のうち60歳以上が24人中18人で75%
 - 聴覚障害者のうち60歳以上が26人中20人と77%
 - 知的障害者は、10歳未満と10代の回答者が41%を占め、50歳代までの回答者を合わせると93%
 - 震災時の状況の違い
-

障害等の種別

- このアンケートでは、障害が重く介助をより多く必要とする人の災害時の状況を把握するため、身体障害者手帳1種1級または1種2級の肢体障害があり、かつ愛の手帳を持つ人と、難病等で医療的ケアを必要とする人を、「重症心身障害・難病(略して重心と記す)」として分類した。
- 重心に分類した人以外の愛の手帳所持者は知的障害に分類した。知的障害の中には、発達障害や精神障害、肢体障害、聴覚障害、視覚障害等を重複して持つ人も含んでいる。
- 視覚 25人 聴覚 26人 肢体 17人 知的 148人
重心 24人 精神 13人

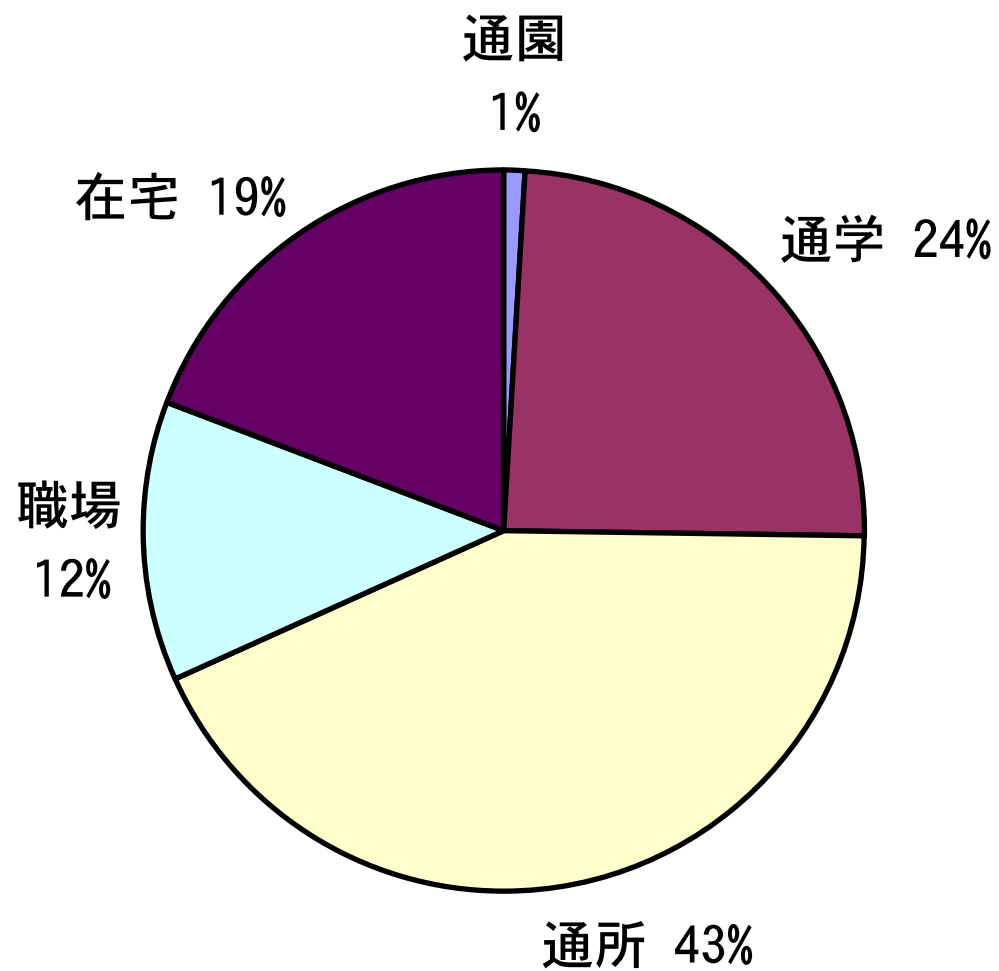
居住状況



障害の種別により居住状況に特徴

- 視覚障害者は一人暮らしの割合が52%と一番多い。
 - 次いで一人暮らしが多かったのが、肢体障害者で35%
 - 3番目が聴覚障害者で27%
 - 精神障害者はグループホーム居住者が46%
 - 重心は100%家族と同居
 - 知的障害者は家族と同居が92%、グループホームが8%、一人暮らしの人はいない。
-

日中の状況



中野区の障害児・者への東日本大震災による影響について 障害・状況別アンケート数

	合計数	通園	通学	通所	職場	在宅
視覚	25			2	6	17
聴覚	26				7	19
肢体	17		1	6	2	8
知的	148	1	55	74	15	3
重心	24	1	5	14		4
精神	13			12	1	
合計	253	2	61	108	31	51

支援者 96 (学校職員・通所施設職員・ヘルパー・企業担当者等)

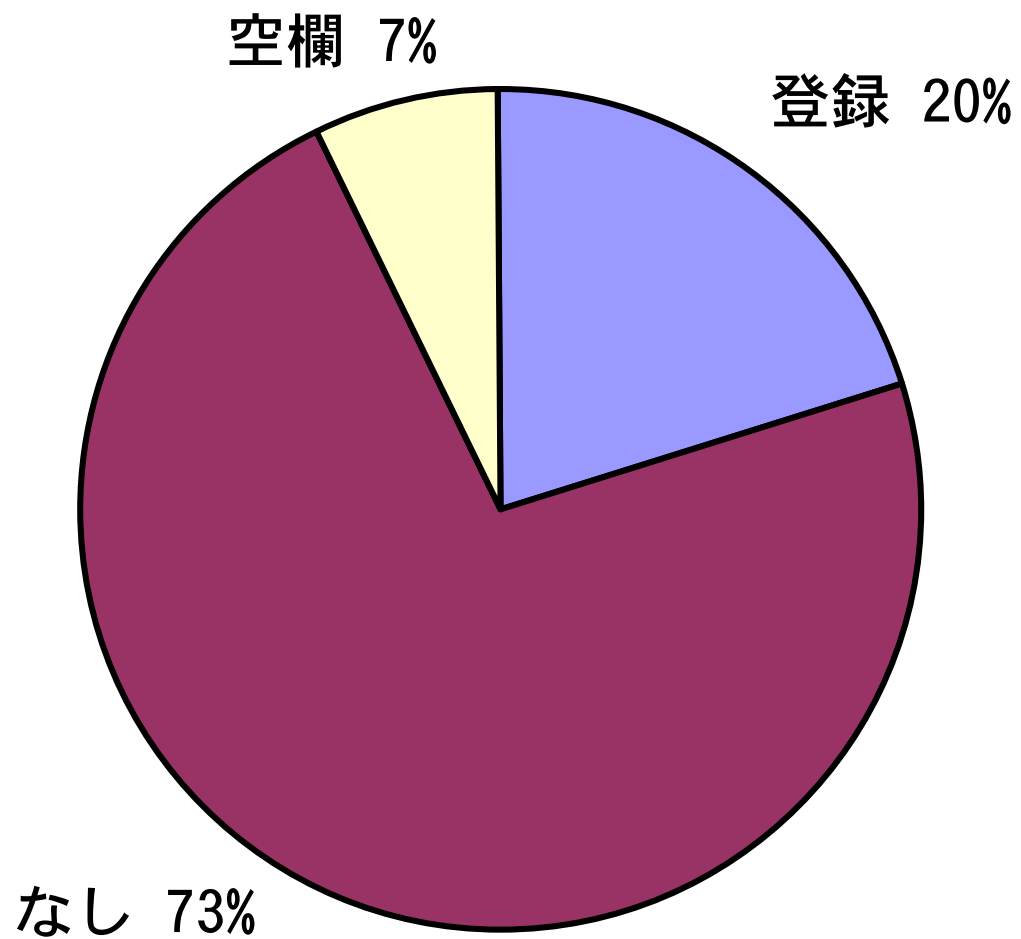
アンケート回収総数 349

日中どこかに通っている人は81% 下校や帰宅時間と重なり影響を受けた

* 障害別に日中状況に違い

- 聴覚障害者は73%が在宅。
- 視覚障害者は68%が在宅。
- 肢体障害は44%が在宅。
- 重心は83%が、日中、学校や通所施設に通っている。
- 知的障害児者は99%が、日中、学校、通所施設、職場に通っている。
- 精神障害者は回答者全員が通所や職場に通っている。

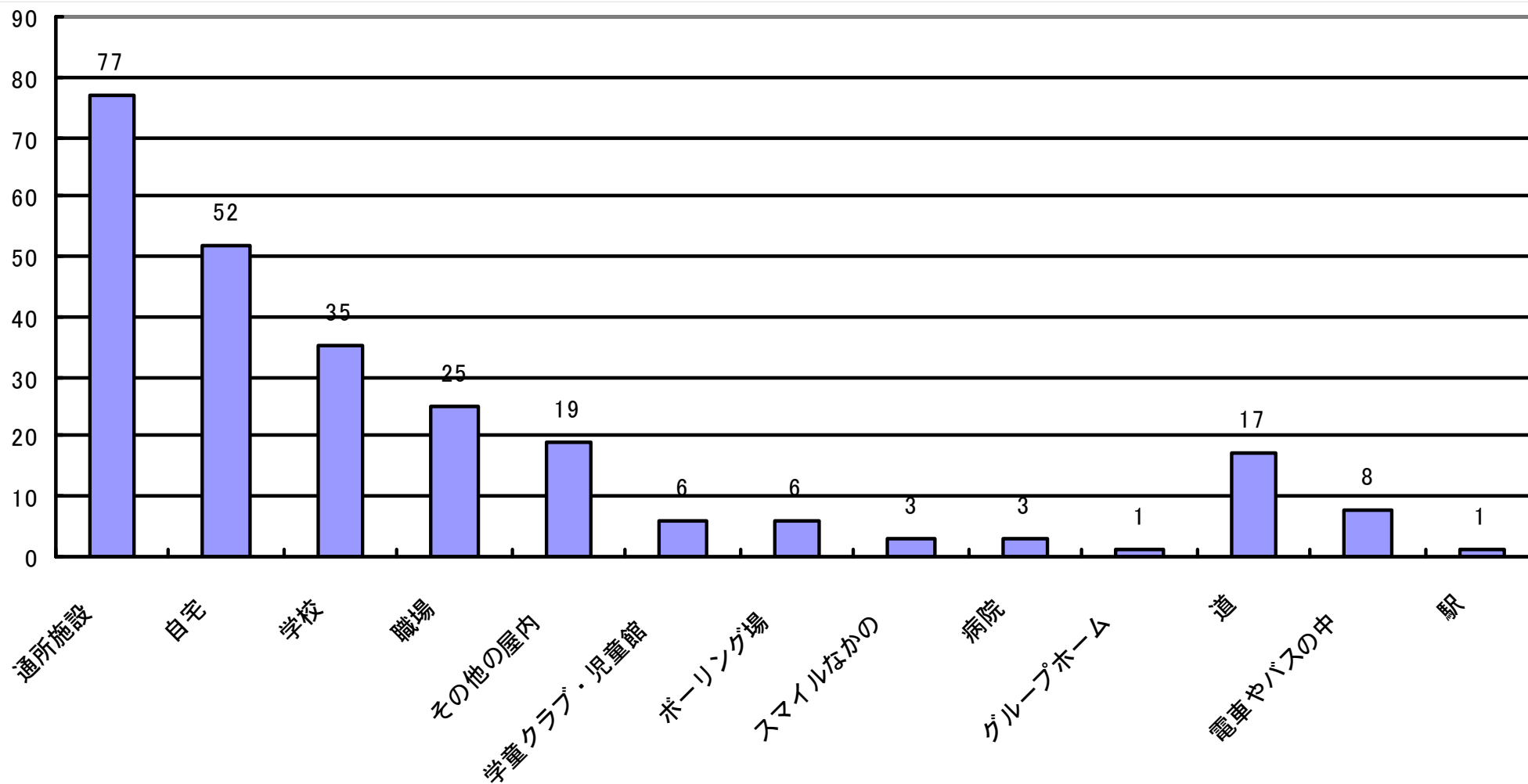
中野区非常災害時救援希望者登録制度



地震が起きた時、どこに居ましたか？

	視覚	聴覚	肢体	知的	重心	精神	計
屋内	24	24	16	127	24	12	227
自宅	13	9	9	11	7	3	52
グループホーム				1			1
通所施設			4	53	12	8	77
学校				33	2		35
職場	6	4	1	14			25
その他	5	11	2	15	3	1	38
(その他主な内訳)		スマイル1	スマイル2	学童・児童館 5	学童 1		学童・児童館 6
		病院 1		ボーリング場 6	病院 2		ボーリング場 6
屋外	1	2	1	21		1	26
道	1	2		14			17
電車やバスの中				7		1	8
駅			1				1

地震時の場所



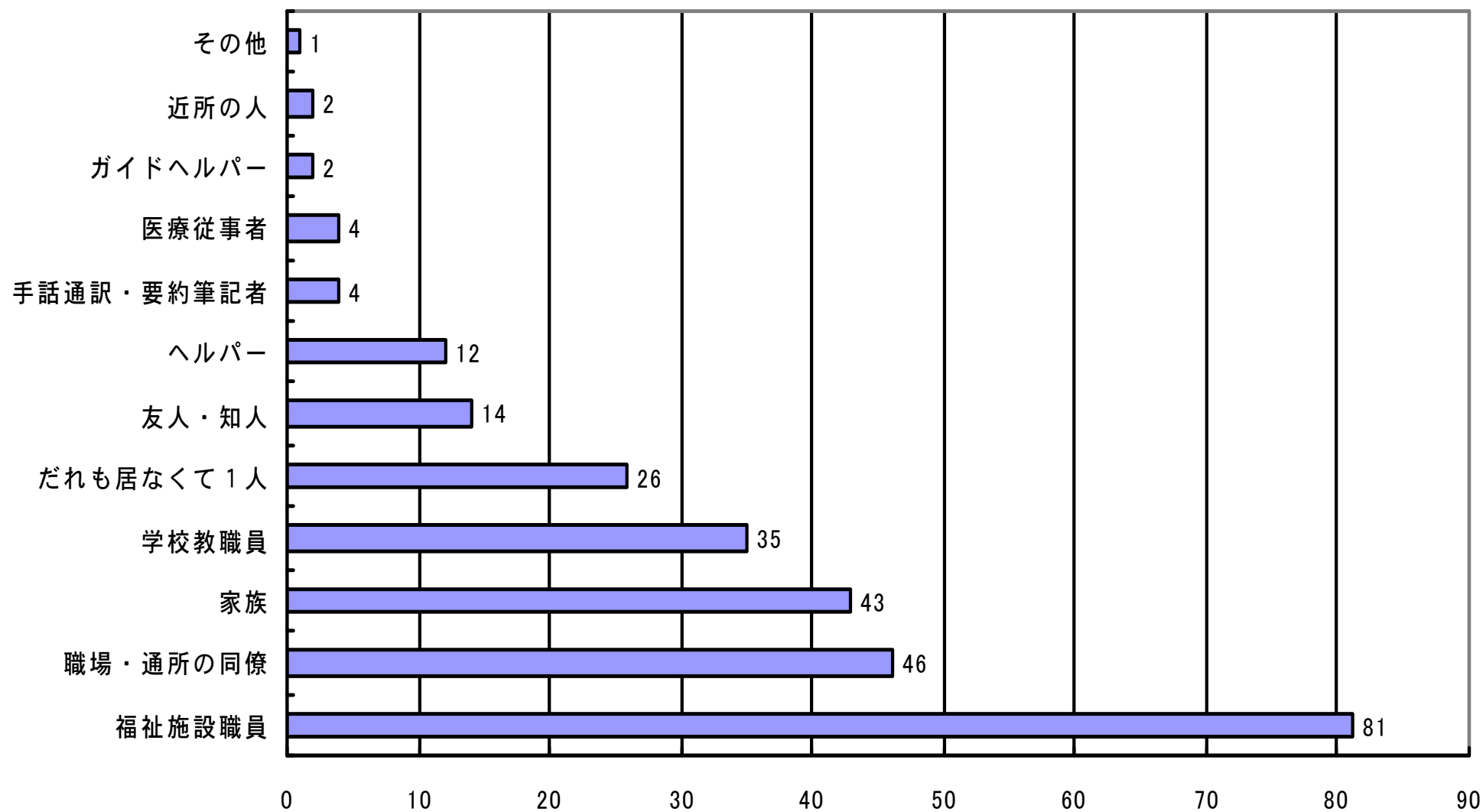
地震の時、 57%の人が日中いつも通っている場所にいた

- 屋内にいた人が90%、屋外にいた人が10%
- 通所施設にいた人が30%
- 学校にいた人が14%
- 職場にいた人が10%
- 自宅やグループホームにいた人は21%
- 屋外で一番多かったのが道にいた人

地震が起きたとき 障害のある人のそばにだれがいましたか？

	視覚	聴覚	肢体	知的	重心	精神	計
だれもいなくて1人	6	6	5	6		3	26
家族	7	6	4	19	6	1	43
職場・通所の同僚	5	3	1	33	2	2	46
友人・知人		6	3	4		1	14
近所の人		1				1	2
ヘルパー	3	1	2	3	3		12
学校教職員等				33	2		35
児童館・学童職員				5	1		6
福祉施設職員		1	3	58	13	6	81
ガイドヘルパー	2						2
手話通訳・要約筆記		3		1			4
医療従事者	1	1			2		4
その他			1				1

地震時そばに居た人



地震の時、一人でいた人が10%

- 自宅で一人だった人が18人で一番多い。
 - 2番目に、道で一人だった人が6人。
 - 災害後安否確認がまず必要になるのは一人だった人
 - そばにいた人で一番多いのが、福祉施設の職員
-

地震当日の問題 視覚障害者

- 連絡が取れず困った。帰宅が大変だった
 - * 息子と連絡が取れない。帰宅に時間がかかった。徒歩で3時間。(40代・職場・同僚)
- ひとりで恐かった
 - * 揺れがひどく恐かった。動きがとれなかった。助けを求められず、翌日ヘルパー事業所からヘルパーさんが訪ねてくれた。(50代・自宅・ひとり・一人暮らし)

地震当日の問題 聴覚障害者

- 近隣とコミュニケーションがとれず困った
 - * 机の下にもぐってその後家の外に逃げた。近所の方とのコミュニケーションが取れずに困った。伝えたくても伝わらない。(70代・自宅・ひとり)
- メールが取れず困った
 - * 携帯のメールが取れなかったので困った(70代・自宅・家族)
- 放送が聞こえないのが困った
 - * 「電話が出来ない」「放送が聞こえない」のが一番不便だった。(40代・職場・同僚)

地震当日の問題 身体障害者

□ エレベーターが止まり困った

- * 自宅に帰った。しかし、地震でエレベーターが止まり、団地の人達4~5人で車イスごと階段をかついで途中まであがったが、もうだめだと言われて、消防署、レスキュー、警察に電話をかけたが、3時間~4時間待つてほしいとのこと。そこに「どうしたの」と看護師さんがみえて、担架に乗り無事自宅の5階についた。(70代・スマイルなかの5階・知人)

□ 家族と連絡がとれず一人きりになり不安だった

- * 家族と連絡が取れず、電車が止まり、夜中まで一人きりになってしまった。(20代・自宅3階・ひとり)

地震当日の問題 重心・難病

□ エレベーターが止まり困った

- * 通所バスで帰宅したが自宅がマンションの8Fでエレベーターが止まり、8Fまで通所施設の職員と管理人に運んでもらった。(40代・通所施設3階・職員)

□ 呼吸器使用のため停電が一番心配だった

- * 夜のヘルパーが電車不通の為、来られなかった。呼吸器使用のため電気の問題が一番心配だった。直下型が来た場合、ヘルパーが来ることも不可能だと思うし、又、電気が止まれば家族一人でアンビューを何時間も押し続けることも無理だと思っている。(90代・自宅・家族)

地震当日の問題 知的障害児・者 ①

- 下校時一人だった子どもが心配だった
- 学校・学童・児童館・通所施設との連絡が困難で、引取り方法が混乱した
 - * 14:30下校の後、介助の先生が子どもを駅まで行って呼び戻して下さった。私は学校に徒歩で向かった。九段下から新宿まで歩き電車を待ったが動かずバスと徒歩で夜 10:30頃学校についた。
(10代・道・ひとり)
 - * 連絡がなかなか取れず、一人でいるのか退勤していないか不明で不安だった。(20代・通所施設・職員)
- 地震におびえ気持ち不安定になる

地震当日の問題 知的障害児・者 ②

□ 会社との連絡が困難で、帰宅困難への対応が不安だった

- * 会社に連絡が取れず、時間がかかって(1時間くらい)ようやく電話連絡が取れた。親がバスを乗り継いでやっと会社に着いたら、本人が退社時間と重なったという事もあり、退社して最寄りの駅に行っていて本当にあわてた。駅で見つけて一緒に帰れたが…。(20代・職場・同僚)
- * 入社日で支援員が一緒だったが、携帯で連絡が取れず、事業団の方から夜になって泊ませる、大江戸線が動き出したので帰すなど、いろいろあった。結局翌日AM1:30頃、支援員と一緒に近くの駅まで帰って来て、迎えに行った。会社内で起き、また支援員が一緒に助かった。会社側は今後震災が起きた場合は、泊ませることにするそうだ。(30代・職場・同僚)

地震当日の問題 精神障害者

□ 連絡が取れず困った

* 家族と連絡が取れなかった。

□ 帰宅が大変だった

* 電車が止まってしまい、帰宅が困難になった。(渋谷から徒歩4時間)

□ どうしてよいかわからなかった

* 外に出たが、外に出た方が良いのか、建物の中にいた方がいいのかわからなかった。

地震当日の問題 支援者 ①

□ 帰宅させるか待機させるか判断に迷った

*余震が続いた為帰宅させるタイミングの判断が難しかった。家族に電話がつながりにくく困った。結局夜まで施設で預かることになる。(福祉施設職員)

□ 保護者と連絡が取れず2名しか迎えに来られなかった。残りの生徒達は担任が手分けして家まで送り届けた。(学校教職員)

□ グループホームから利用者に連絡が取れず困った

□ 安否確認が難しかった

*通所者の方をそれぞれご自宅に帰宅して頂いた後、電話が通じず安否確認ができなかった。(通所施設職員)

地震当日の問題 支援者 ②

□ 学校での対応の事例（学校教職員）

- * 教室にて、生徒と帰宅できない保護者と共に宿泊することとなり、その準備や状況把握が大変だった。

□ 企業での対応の事例（企業の指導員など）

- * 電話連絡がなかなかつかない。電車が止まって帰れない人は会社に泊まった。社員が障がい者の面倒をみた。

□ ヘルパー等の対応の事例

- * 障害者を一人にしておけないので家族が帰宅するまで障害者のそばにいた。

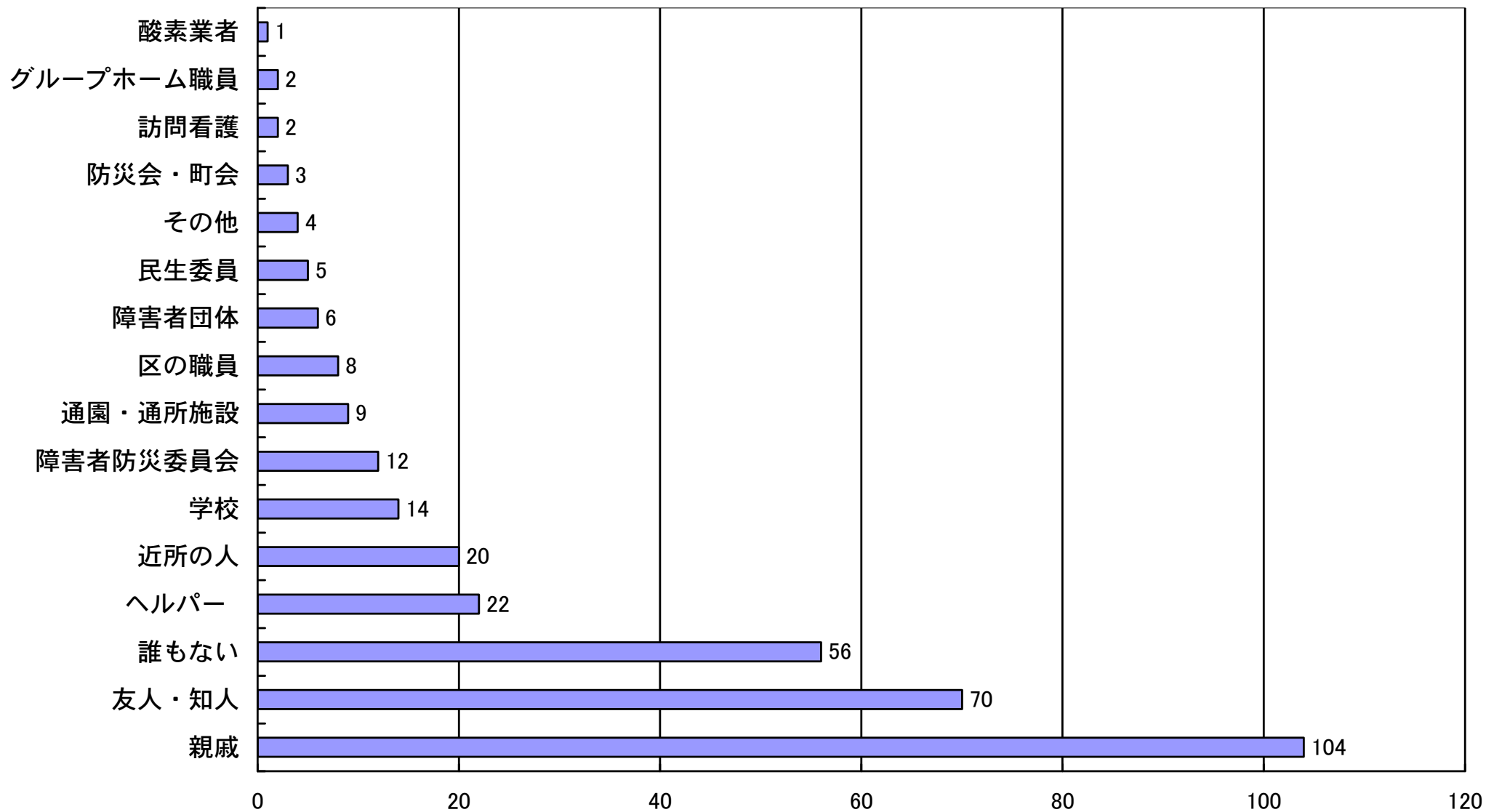
翌日や数日後、困ったことは何ですか？

- 食料や日用品などが買えなかった
- 近所の人と話が通じないので困った(聴覚)
- 外出が難しかった
- 精神的に不安になった
- 余震や交通機関の混乱で、学校や会社を休んだり、保護者等が送迎した。
- 医療機器の使用が不安だった
- 介護用品や特定の食品が手に入りにくかった
- 移動手段に困った。(ヘルパー)
- 通所が可能か?判断に迷った。余震が続いた為、作業するのに大丈夫なのか不安があった。(通所施設職員)

震災後、安否確認などのために、 誰かが訪問または連絡してきましたか？

	視覚	聴覚	肢体	知的	重心難病	精神	計
親戚・家族	10	10	6	64	11	3	104
友人・知人	5	7	6	40	8	4	70
近所の人	5	3	5	4	3		20
民生委員	4		1				5
学校			1	11	2		14
ヘルパー	7		5	4	6		22
通所施設			0	9	2		9
町会・防災会		1	1	1			3
障害者防災委員会		2	1	7	1	1	12
区の職員			1	5	2		8
誰もない	4	6	4	35	3	4	56
その他	2		1	7	3	3	18
(その他の内訳)	中視協2			育成会 4	訪問看護2	G H職 2	
					酸素業者1		

安否確認の連絡



誰からも安否確認の連絡がなかった人が 22%で3番目に多い

- 安否確認の連絡で一番多いのが親戚、次が知人。
 - ついでヘルパー、近所の人。日常的にかかわっている人や近所の人
が安否確認に動いている。
 - 登録制度で安否確認にまわってきた人はいない。
 - 民生委員や町会の人自主的に安否確認を行なったものと思わ
れる。
 - 「防災委員会からメールが来た時はうれしかった」
 - 「だれも来なかったので安否確認を徹底してほしい」
-

震災時どのような対策が必要ですか？

- 声をかけてほしい
- 安否確認・連絡が取れるシステムが必要
- 情報が伝わるシステムが必要
- 非常災害時救援希望者登録制度の見直し
- 引取り方法の確立
- 通学・通所など外出途中の対策
- 家族間での緊急時の確認
- 通所施設などに食料・毛布など防災グッズの備蓄が必要
- 避難訓練やシュミレーション、避難マニュアルの作成
- 地域とのつながり、近所の人とのコミュニケーションが大切
- 災害時の相談窓口の設置

災害時のために 自分で準備していることや行っていること

- * 筆談用の紙とペン、補聴器電池も非常袋に用意した。
 - * 呼吸器のバッテリー、吸引器の予備、薬、水など用意した。
 - * 電源確保のための無停電電源を買った。
 - * 財布の中に常に「緊急連絡先」を入れてある。
 - * 本人の身元、愛の手帳を持っている事、病名・病院名・主治医・連絡先(数ヶ所)など本人の情報を一覧にまとめ本人に常時持たせて、困ったときにそれを見もらう。
 - * 家族で連絡方法や避難所の確認。
-

災害時のために 施設や会社で準備していることや行っていること

- グループホームで町内会の防災訓練に参加できるようにお願いしている。
 - 災害用の利用者の薬3日分を預かっている。
 - 会社で非常時の連絡方法を確立させた。本人達には緊急カードを作成し持たせた。
 - 帰宅困難な場合を想定し、毛布、避難食、水を職場で用意した。
 - 緊急連絡網の再整備。今回の地震を教訓に災害マニュアルの見直し。
-

その他、感想、意見、要望 ①

- 安否確認、声をかけてほしい
 - 災害時救援希望者登録制度が役に立っていない
 - 障害者防災委員会やヘルパー等からの連絡が心強い
 - 移動途中が一番心配である。一般の人全てが認識してくれる
障害者の為のカードが必要だ
 - 災害時の対応を決めておきたい
 - 筆談ボードを持ち歩く
-

その他、感想、意見、要望 ②

- 人口呼吸器や吸引器等の利用者のための対応が必要
 - 障害のある人も利用しやすい避難所になって欲しい
 - グループホームに日中も人の配置をしてほしい
 - 震災後出勤できない職員があり施設が大変だった
 - 日頃から障害への理解を広げたい
 - ボランティアなど災害時の支援システムが必要
 - 横でつながるネットワークの人ごと、地域ごとの設計が必要
-

アンケートから見えた障害別の課題

在宅で高齢の視覚障害者の問題

- 一人暮らしが52%で、障害別で一番割合が高い。そのうち65歳以上が69%。最高齢が95歳。
 - 60歳以上が75%で、障害別で2番目に割合が高い
 - 68%が日中在宅で在宅率は2番目に高い。震災当日52%が自宅に居た。
 - 震災時一人だった人が6人。うち70歳以上が5人。
 - 安否確認にだれも来なかった人が4人。うち1人は80歳代ひとり暮らし。
 - 地震後、民生委員が来た人5人のうち、4人が視覚障害者。
 - 安否確認は親戚の次にヘルパーが多かった。
-

アンケートから見えた障害別の課題

安全確認が困難な視覚障害者

- 一人では安全確認が困難で、避難がむずかしい。
 - 一人暮らしの高齢者が多く、安否確認が必要。
 - 電話が不通で連絡が取れない。
 - 交通機関の混乱で歩行外出が厳しい状況。
 - 水・食料品の確保が困難。
 - ガイドヘルパーと一緒に心強かった。
 - 「声をかけてほしい」「安否確認にきてほしい」が強い要望。
-

アンケートから見えた障害別の課題 在宅で高齢の聴覚障害者の問題

- 60歳以上の割合が77%と、障害別で一番高い。
- 73%が日中在宅で、在宅率は障害別で一番高い。震災当日は35%の人が自宅に居た。
- 一人暮らし7人中6人が70歳代以上。最高齢が82歳。
- 一人暮らしで震災時ひとりだった人が5人。
- 安否確認にだれも来なかった人が6人。うち4人が70歳代。

アンケートから見えた障害別の課題

孤立しがちな聴覚障害者

- 孤立を防ぐため安否確認が必要
 - 助けを呼べない。近隣などとのコミュニケーションが困難
 - 放送が聞こえない。情報の保障が課題
 - 手話通訳者と一緒に助かった。
 - コミュニケーションが大切。ノートや筆談ボードを持ち歩く。
-

アンケートから見えた障害別の課題

帰宅をめぐる混乱した知的障害児・者

- 知的障害者から見える通学や通所、通勤時の問題
- 知的障害児・者は50歳代までの回答者が93%。99%が日中どこかに通っている。
- 2時半の下校時間と重なり、1人で学校から帰る途中、震災にあった知的障害児が5人。

*親が公衆電話で学校に安否確認。介助の先生が子どもを駅に呼び戻しに行った。

アンケートから見えた障害別の課題

帰宅をめぐる混乱した知的障害児・者

- 学校や通所施設、職場と保護者との連絡が困難で、引き取りや帰宅困難で混乱した
- 登下校中、帰宅中の場合は不安
- 学校や通所施設、会社側は帰宅させるか待機させるか、宿泊させるか判断に迷った。
- 特別支援学校が自宅から遠く、迎えが必要な兄弟がいる場合、大変だった。
- 余震に怯え、パニックをおこす。
- いつもと違うことに適応できない。理解できない。

アンケートから見えた障害別の課題

移動が困難だった身体障害者

- エレベーターや電車が止まり困った。
 - * スマイル5階から1階まで、会館にいた人達に車イスごと階段をおろしてもらい帰宅。
 - * 全介助が必要だが、電車が止まって家族が帰れず、夜中まで1人きりになってしまった。
 - * 夜のヘルパーが電車不通のため来られなかった
- 一般の避難所に行けない人への対応を
 - * 避難所に車椅子トイレが欲しい。自宅で復旧を待つ場合、救援物資を届けてほしい。

アンケートから見えた障害別の課題

停電が心配な医療的ケアが必要な障害者

- 呼吸器使用のため停電が一番心配。

*近隣の開業医の方々の協力があると安心。

- 介護用品や特定の食品が手に入りにくい。

* 薬がないとてんかんの重積発作になるので、薬が手に入るようにしてほしい。

- 安否確認が必要
-

アンケートから見えた障害別の課題 不安になった精神障害者

- 回答者13人中、グループホーム入居者が6人、家族と同居が5人、一人暮らしが2人。
- 地震時に通所施設にいた人は8人。ひとりだった人は3人
- 誰からも安否確認の連絡がないと答えた人が4人
 - 地震の時どうしてよいかわからなかった
 - 食料や日用品などが買えなかった
 - テレビやラジオの情報で不安になり、通所不可になった方、病状悪化の方多数

アンケートから見えた共通の課題 ①

安否確認が必要

- 日中の災害時の特徴は家族が別々で離れた状態
- 誰からも連絡がなかった人が全体の22%
- 要援護者救援登録制度に登録している障害者のところに、この制度で安否確認に回ってきた人がいなかった
- ヘルパーや障害者防災委員会などからの連絡に安心できた。
- 区の要援護者救援登録制度を効果あるものに見直していく
- 近隣と助け合える環境づくり
- 学校や通所施設、ヘルパー事業所、勤務先などによる安否確認のシステムづくり
- 障害者団体による安否確認の仕組みづくり
- 多様な安否確認の仕組みづくりが必要

アンケートから見えた共通の課題 ②

引き取り方法の確立が必要

- 地震の時に自宅外にいた障害者は79%。
- 特に知的障害児者の引き取り方法をめぐって混乱。
- 通所施設や会社は帰宅か待機か判断に迷った。
- 登下校、通勤、帰宅途中の場合が不安。
- 学校や施設、会社において対応を統一してほしい。
 - * 必ず保護者に引き渡すまで預かってほしい。
 - * 帰宅できない場合は泊めてほしい。
 - * 災害時の対応を事前に関係者間で確認しておく。
 - * 通所、通学途上では救援カードを持たせるなど。

アンケートから見えた共通の課題 ③

障害があっても避難できる避難所

- 避難所に車椅子トイレが欲しい。
- 障害のある人も利用しやすい避難所に。
- 出来れば一般と一緒にでない避難場所を。
- 障害者に特化した避難所設置は避けるべき。
- 通所施設を避難所として宿泊に対応できるように、毛布などの備蓄が必要
- 避難所に行けない人への支援物資の支給 を。
- 自閉症児であり、体育館での避難生活は困難。集団から離れている場合にも配給が受けられるように。

各障害者団体からの提言 ①

NPO法人 中野区視覚障害者福祉協会

○ 最大の災害対策は

近隣住民との日常的な交流

- 視覚障害者は外出(歩行)、視覚による状況把握、情報取得が苦手
 - ガイドヘルパーも家族も発生時にそばにいるとは限らない
-

各障害者団体からの提言 ②
中野区聴覚障害者福祉協会
中野区中途失聴・難聴者の会

- 避難所での手話通訳配置のシステム形成
 - 中野区とNPO中野区聴覚障害者情報活動センターで契約を結び、震災後の避難所での手話通訳配置についてマニュアルを作成する。
 - 避難所での視覚情報発信のシステム形成
 - 同じく、水の配給などの情報を視覚化するための、マニュアルを作成。
-

各障害者団体からの提言 ③

NPO法人 **ねこの手** (障害者の自立支援団体)

○自分が出来ることから、はじめよう!

□ 障害があってもできることを考え行動していこう!

○災害時障害者支援体制をつくりましょう!

□ 安否確認、避難後の支援が行えるよう、区や障害者団体等で障害者災害時対応マニュアルを作成。

○バリアフリーを前提に!

□ 避難所や仮設住宅に車イス用トイレや段差解消を。

□ 災害時バリアフリーマップ作りを。

各障害者団体からの提言 ④

中野区肢体不自由児者父母の会

- 災害時の安否確認の支援
 - 避難所内のバリアフリーおよび障害者(車イス)用トイレの充実
 - 医療的ケア障害児者の避難場所の充実
 - 各々の通所中の災害時の通所施設の避難場所の設定および防災グッズの確保、住・食の確保の充実。
-

各障害者団体からの提言 ⑤

中野区愛育会(知的障害児・者 親の会)

- 通勤・通学時等、一人でいる時に被災した場合、知的障害児・者を早く発見し保護者に引き渡すことができるシステム形成
 - 中野区災害時救援登録制度を見直し、区と障害者団体が連携して安否確認が徹底できるシステムを作る
 - 知的障害のある人が過ごせるような避難所の環境づくり
 - 知的障害児・者への理解を広める。
-

